

ウズラ・ヤマドリ・ヤマシギに係るモニタリング手法の検討状況

1. ウズラ

(1) 調査方法

1) 繁殖期：プレイバックおよびルートセンサスによる調査

・プレイバック調査

一般的には潜行性の強い鳴禽類の確認に適した方法で、鳴き声に反応を示す鳥類に用いられる。これまでの調査では、河川堤に3～4kmのセンサスルートを設け、ルートを移動しながら200mごとにウズラの鳴き声を3分間再生し、反応する声を1分間静聴する方法で実施した。

・ルートセンサス

プレイバック調査で設定したルートを時速約2km/h程度で歩行し、鳴き声などにより生息個体の確認をおこなった。

2) 越冬期：猟犬を利用した追い出し調査

ウズラは潜行性が強く、すぐ近くにまで近寄らないと草の中でじっと留まり、飛び立たないことから、ルートセンサス等で確認することは困難な種である。このため、本調査ではかつてウズラ猟をしていた猟犬を利用し、ウズラを草むらから追い出すことにより生息個体を確認した。

かつて、猟場として利用していた地域内に数kmの調査ルートを設定した。調査者と飼い主（ハンター）がルートを猟犬と共に歩き（猟犬は飼い主からおよそ100mの範囲内を探索した）、猟犬がポイントした場合にはその周辺を丹念に踏査して飛び立つウズラをカウントした。

(2) 調査結果

1) 繁殖期：

試行的に石狩川で2期実施した。

プレイバック調査で音声に反応する個体を確認できたほか、ルートセンサス中に囀る個体を確認できた。

2010年には見られなかったが、2009年には音声再生装置周辺に飛来してさえずる行動が確認されたことから、囀りの音声に強く反応を示す時期があり、その時期に本調査方法を用いると効果的に生息確認ができると考えられた。

表 ウズラの繁殖期調査結果

調査地域	調査年	調査日	ルート数	ルート総延長 (km)	確認数	
					プレイバック	ルートセンサス
石狩川	2009	6月6日 ～ 6月8日	4	14.93	4	3
石狩川	2010	6月16日	2	9.53	—	1
		6月16日 ～ 6月17日	7	27.82	9	—

※：上記の他に、2009 年は青森県岩木川河川敷や群馬県及び埼玉県の利根川河川敷で、
2010 年は青森県仏沼周辺で調査を実施したが、ウズラは確認されなかった。

2) 越冬期：九州の3地域で3期実施（12～1月）

調査時期、調査地によって結果に差があったが（生息密度：0～1.91 個体／km）、猟犬を利用した追い出し調査により、効果的にウズラを発見できた。

これまでの調査で、九州に渡来するウズラは休耕田や刈り取り後の水田にイネ科草本の生えている環境も利用していると考えられた。このことから、九州における調査時期については、ウズラが渡来してから、水田が耕起される（12月下旬から翌1月上旬頃）までが適期であると考えられた。

表 ウズラの越冬期調査結果

調査地域		調査日	踏査距離 (km)	確認数	生息密度 (個体/km)
宮崎県	一ツ瀬川左岸	2009年12月9日	2.83	5	1.77
		2011年1月12日	2.33	0	0.00
		2012年1月10日	2.85	0	0.00
	一ツ瀬川右岸	2009年12月9日	2.48	2	0.81
		2011年1月12日	1.64	0	0.00
		2012年1月10日	2.59	0	0.00
	加江田川	2012年1月11日	2.07	2	0.97
熊本県	阿蘇山	2010年1月6日	5.25	10	1.90
		2011年1月13日	5.91	3	0.51
		2012年1月12日	5.16	2	0.39
	阿蘇山(別ルート)	2012年1月13日	7.64	0	0.00

(3) 課題

1) 繁殖期

6月以前に調査を実施して、調査適期を検討する必要がある。

河川敷以外の麦畑等にもウズラが生息していると考えられるため、そのような環境における調査手法を検討する必要がある。

2) 越冬期

モニタリング手法は概ね確立された。

調査には、猟犬を使用する人の協力が必要となり、体制の整備が必要。

2. ヤマドリ

(1) 調査方法

毎年 11 月 15 日の初猟日に全国的に実施されている、キジヤマドリ出会う調査による。

(2) 調査結果

ヤマドリは昭和 38 年からデータが蓄積され、性別に目撃出会数が記録されているので、一人当たり発見個体数や、性比の推移が把握されている。

一人当たり出合羽数は減少の傾向を示していたが、昭和 50 年よりメスの捕獲が禁止され、それ以降減少率は低下した。しかし、メスの捕獲が禁止された後も、性比がメス側に大きく偏る結果は得られていない。

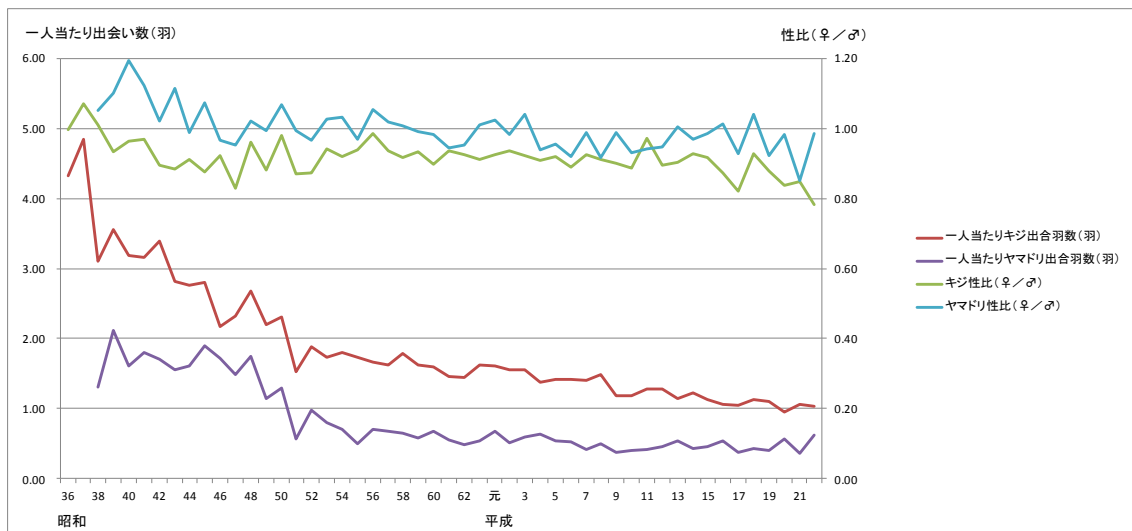


図 キジヤマドリ出会う数調査結果

(3) 課題

長年継続して実施されており、調査手法はある程度確立され、モニタリング体制も整備されているが、調査精度については不明な点がある。今後各県で実施されている調査手法などを詳細に確認し、調査結果の検証が必要である。

3. ヤマシギ

(1) 調査方法

ヤマシギの調査手法としては主にライトセンサスが用いられていることがわかっているため、越冬期にライトセンサスを実施した。

ヤマシギは越冬期の日中には林内の藪などを隠れ場所とし、夜間に湿地、水田、農耕地などに採食に出かける夜行性である。このため、本種を越冬期に調査する際には、ライトセンサスが用いられている。

センサスは、日の入り約 1 時間後から深夜 24 時までの間に行った。林内を通る林道や平野部の農耕地を通る農道などにあらかじめルートを設定し、自動車です速 5 ～ 10 km/h 程度の速度を保ちながら走行し、自動車のヘッドライトと手持ちのスポットライトの光で、ルート周辺を照射しながらヤマシギを探索し、個体の数を記録した。なお、近縁である同属のアミヤマシギでは月の明るいときに出現頻度が高いことが知られているため、調査は満月に近い日に実施した。

(2) 調査結果

試行的に、千葉県銚子市（狩猟による捕獲数の多かった地域）、石川県加賀市、鹿児島県中之島（既往調査のあった場所）の 3 地域で 1 期実施した。

調査地域、調査時期によって結果に差はあったが、全体で約 42 km をセンサスして 34 羽のヤマシギが確認でき、越冬期においてはライトセンサスがモニタリング手法として有効であったと考えられる。

表 ヤマシギの越冬期調査結果

調査地		調査日	満月	センサス距離 (km)	確認数	生息密度 (個体/km)
千葉県	銚子市・旭市	2012年1月11日～12日	1月9日	17.98	1	0.06
石川県	加賀市	2011年12月7日～8日	12月10日	6.68	4	0.60
鹿児島県	十島村(中之島)	2012年3月8日	3月8日	17.68	29	1.64

(3) 課題

適切な調査時期や、調査地域等の検討をする必要がある。

同所的にタシギが生息し、ライトセンサス中に飛び立つとヤマシギと識別が困難な場合があるため、調査中の両種の識別方法を整理する必要がある。

繁殖地における状況が不明なため、繁殖期の調査を実施する必要がある。